

命を見つめて—ある少女の作文より

テレビでも紹介されましたので、ご存知の方もおられるかもしれませんが、亡くなる直前に書いた作文(「命を見つめて」)が、今もなお多くの人々に深い感動を与え続けている猿渡瞳さんという少女をご紹介します。

彼女は小学校6年生の時、「右大腿骨骨肉腫」というガンに侵され、医師から「余命半年」であることが母親に告げられます。

母親はこのことを娘に告げるべきかどうか、幾日も悩みましたが、意を決して我が子にガンであることを打ち明けます。

それは、我が子に何としてでもガンと正面から闘ってもらいたいという母親の苦渋の選択でした。

その時、彼女は大き粒の涙を流しながらも、この厳しい事実をしっかりと受け止め、「教えてくれてありがとう。ママがガンじゃなくて私がガンで本当に良かった。私、ガンなんかには負けないもん」と健気に答えるのです。

11歳の子供とは思えない深い人間愛に満ちた言葉です。

その日から、彼女は必ず治ると信じて、医師に病状を尋ねながら治療方針を決め、病いと闘い続けました。

しかし、その願いも空しく平成16年9月、1年9ヶ月の闘病の末、13年の短い人生の幕を閉じました。

闘病中、彼女は「たくさんの仲間が命をかけて教えてくれた大切なメッセージ(命の尊さ大切さ)を、世界中の人々に伝えていくことが私の使命」という思いを強く持つようになります。

そうして、亡くなる2ヶ月前(平成16年7月)、「大牟田市青少年健全育成弁論大会」に学校代表として、その思いを綴った作文「命を見つめて」を発表するのです。

作文は、彼女の死後、全国作文コンクールで優秀賞を受賞しました。

そのことが、新聞やテレビなどを通じて多くの人の知るところとなりました。さらに、彼女の死後、『瞳スーパーデラックス—13歳のガン闘病記』の出版をはじめ、闘病生活がテレビでドラマ化されたり、中学の教科書に採用されたりと、彼女の願い—命の尊さを世界中の人々に伝えていく—は、今静かに広く人々の心に届いています。

それでは早速、彼女の作文をご紹介します。

「命を見つめて」

大牟田市立田隈中 2年 猿渡瞳

みなさん、みなさんは本当の幸せって何だと思いますか。
実は、幸せが私たちの身近にあることを病気になったおかげで知ることができました。

それは、地位でも、名誉でも、お金でもなく「今、生きている」ということなんです。

私は小学6年生の時に骨肉腫という骨のガンが発見され、約1年半に及ぶ闘病生活を送りました。

この時医者に、病気に負ければ命がないと言われ、右足も太ももから切断しなければならないと厳しい宣告を受けました。

初めは、とてもショックでしたが、必ず勝ってみせると決意し希望だけを胸に真っ向から病気と闘ってきました。

その結果、病気に打ち勝ち右足も手術はしましたが残すことができたのです。

しかし、この闘病生活の間に一緒に闘ってきた15人の大切な仲間が次から次へと亡くなっていきました。小さな赤ちゃんから、おじちゃんおばちゃんまで年齢も病気もさまざまです。厳しい治療とあらゆる検査の連続で心も体もボロボロになりながら、私たちは生き続けるために必死に闘ってきました。

しかし、あまりにも現実には厳しく、みんな一瞬にして亡くなっていかれ、生き続けることがこれほど困難で、これほど偉大なものかということを知らされました。

みんないつの日か、元気になっている自分を思い描きながら、どんなに苦しくても目標に向かって明るく元気ががんばっていました。
それなのに生き続けることができなくて、どれほど悔しかったことでしょう。

私のはっきり感じたのは、病気と闘っている人たちが誰よりも一番輝いていたということです。そして健康な体で学校に通ったり、家族や友達と当たり前のように毎日を過ごせるということが、どれほど幸せなことかということです。

たとえどんなに困難な壁にぶつかって悩んだり、苦しんだりしたとしても命さえあれば必ず前に進んで行けるんです。
生きたくても生きられなかったたくさんの仲間が命をかけて教えてくれた大切なメッセージを、世界中の人々に伝えていくことが私の使命だと思っています。

今の世の中、人と人が殺し合う戦争や、平気で人の命を奪う事件、そしていじめを苦しめた自殺など、悲しいニュースを見る度に怒りの気持ちでいっぱいになります。一体どれだけの人がそれらのニュースに対して真剣に向き合っているのでしょうか。

私の好きな詩人の言葉の中に、
「今の社会のほとんどの問題で悪に対して『自分に関係ない』と言う人が多くなっている。自分の身にふりかからない限り見て見ぬふりする。それが実は、悪を応援することになる。私には関係ない

というのは楽かもしれないが、一番人間をダメにさせていく。自分の人間らしさが削られどんどん消えていってしまう。それを自覚しないと悪を平気で許す無気力な人間になってしまう」と書いてありました。

本当にその通りだと思います。

どんなに小さな悪に対しても、決して許してはいけません。そこから悪がエスカレートしていくのです。今の現実がそれです。命を軽く考えている人たちに、病気と闘っている人たちの姿を見てもらいたいです。そしてどれだけ命が尊いかということを知ってもらいたいです。

みなさん、私たち人間はいつどうなるかなんて誰にも分からないんです。

だからこそ、一日一日がとても大切なんです。

病気になったおかげで生きていく上で一番大切なことを知ることができました。今では心から病気に感謝しています。

私は自分の使命を果たすため、亡くなったみんなの分まで精いっぱい生きていきます。みなさんも、今生きていることに感謝して悔いのない人生を送ってください。

この作文には、人間の最も深いところにある「いのちの叫び」というものを感じます。

彼女の願い—命の尊さや生きていることの素晴らしさをみんなに知ってもらいたい—はまさに菩薩の心です。

しかも、その願いが、過酷な現実をしっかりと背負うことによって生まれたところに、この上もなく尊いものを感じるのです。

平成21年2月 「光明寺だより61号」より